

大学生は、意外と暇だ。

今は実家を出て姉貴とふたり暮らしだけど、  
そのうち、別々に暮らすことになるのかな。

来年は俺も就職活動があるし、  
そろそろ、将来のことも考えなきやいけない。

……それでも、姉貴は部屋にいないのかな。

妙に静かだけど……

「ん……」う、かな? でも、なんか違う気がする……。  
もつと腰を使って……」う……」う……」

なんだ、俺の部屋にいたのか。

また台本のチェックでもしてるのかな?

ドアの前で突つ立つたままいるのも何だし、  
部屋に入ろう。

「姉貴、俺の部屋でどうしたの?」

「へ? ……ああっ、『めんつ。  
ベッド、勝手に借りちゃつてつ……  
あと、枕も……ま、股に挟んでたのは、  
別にヘンな』とをしてたわけじゃないよ?」

「…………」

言わなきや気付かなかつたかもしれないのに。

姉貴は股に挟んでいた俺の枕を定位位置に戻して、  
何事もなかつたように、こちらを振り返る。

「……なんて、今さら言い訳しても無駄だよね。  
なんかお姉ちゃん……  
このままだと、ダメになっちゃうかも……」

「その……結論を先に『言つとね……』

ベッドの近くまでいくと、  
いつもの甘い香りが漂つてくる。

そして、急に肩へ力を入れたかと思うと、  
いきなり目の前で姉貴がベッドから立ち上がった。

「お姉ちゃん、やりぱりバージン捨てたいのー」

「へ?」

「……あ。今ちょっと引いたでしょ?  
もお、こつちは真剣に悩んでるのに……」

引いたというか、なんというか。

弟としては、『そうですか……』と反応するしかない。

「ていうか、待ってっ……」

後ずさる俺との間合いをさらに縮めて、  
姉貴の手がこちらの下腹部へと伸びる。

あつという間にベルトを外されて、  
パンツ」と、ズボンをずり下ろされて。

「でも、お姉ちゃんの気持ちも少しはわかるでしょ?  
毎日こうやって弟のおちんちんを触つて、  
お口でもしてあげてるのに……  
セックスの経験がないなんて……さ」

弟の気持ちだつて、わかつてほしい。

毎日、姉に手コキやらフェラをされてるのに、  
童貞だなんて。

「……今、収録中のゲーム、お姉ちゃんが演じてるのは、  
清楚なんだけど、めっちゃ騎乗位が上手いっていう  
ギャップキャラなんだよね」

「あ、騎乗位つてわかるよね?  
女の子が、男の人の上に跨がつて腰を振るつていう……  
ちょうどさつき、お姉ちゃんが枕を股に挟んでやつてた  
みたいに……」

なるほど、それで俺の枕が実験台にされてたのか。  
俺に見られて動搖してたから、  
オナニーでもしてたのかと思つた。

とはいえ、『なぜ俺の枕を使った?』という話だけれど。

「……自分でも、やりすぎなのはわかつてるんだけどね」

「いくら仕事のためとは言え、弟のおちんちんをこんな風に弄つたり、フェラチオまでさせてもらつたのに……こうやつて触つてたら、お姉ちゃんに欲情して、押し倒してくれないかなとか期待もしてたりして……」

余裕で欲情はしてるけど、押し倒すという発想には至つていなかつた。

そもそも、漫画やゲームではよくあるシチュだけど、人を押し倒すつて、かなり難易度高い気がする。

そんな素直に倒れてくれるとは限らないし、押し倒してからの行動も問題だ。

「……でもね。お姉ちゃん、ほんとにこの仕事が大好きなの。だから、もつともつと演技も上手くなりたいし、ラジオで真剣に悩みを相談てくる人たちに、きちんととした答えを返してあげたい……」

「そのためだつたら……エロい女だつて思われてもいい。ふふつ。弟としては嫌かな? すぐおちんちんを触りたがるお姉ちゃんなんて……」

どうしても勘違いしがちだけど、姉貴が俺に手コキやフェラをしてくれるのは、あくまで仕事のため。

……でも、俺はそんな割り切りができなくなつてきてている。実際問題、毎日こんな風に優しく股間を触られて、射精の管理をされていたら、特別な感情だつて湧き上がつてくる。

この先、姉貴以上の人と出会つて、恋愛できるなんて、今は想像もできない。

「……それとも、今日はお口の中出したい?」「ん……出ちやいそうになつちやつた? いいんだよ、我慢しなくとも……いつもイキそうになると、『もつたいないから』ってお姉ちゃんの手を止めようとするんだもん」

「……それとも、今日はお口の中出したい?」「こんなの、ダメになるに決まつてる。

姉貴とこういう関係になつてからは、エロゲーをプレイする機会も減つてしまつた。

性欲もぜんぶ持つていかれてたし、  
毎日が、ゲームより刺激的すぎて。

「いいよ、してあげる……ん……はあ、む……ちゅ、んん……  
はあ、れろつ、ちゅつ……んふ、ちゅつ……れろつ、  
れろれろれろつ、ちゅうう、ぢゅつ、ぢゅるるう……」

「んん、ぢゅつ……ほ……はあ、ふふつ……毎日出しているのに  
いつも元気だよね……」

姉貴は、いつも嬉しそうに俺のを咥えてくれる。

射精すると、さらに喜んでくれるから、  
何度もだつて出すところを見せてあげたくなる。

おそらく姉貴からしてみたら、  
手コキやフェラは、自己承認欲求を満たす  
行為のひとつなんだろう。

だから、俺のが大きく反り返ると、  
恍惚とした表情を浮かべてキスの雨を降らしてくる。

女の子が言う『おつきいのが好き』というのは、  
そう言つた精神的な充足も、関係しているのかもしれない。

「……ねえねえ、本当に手や口だけで満足?  
」のまま勢いで、お姉ちゃんとシテみない?」

亀頭を、ぐりつぐりつと手のひらでひねりながらの  
このセリフはひどい。

あまりにも、童貞殺しだ。

「……くす、誘惑してやつた。そんな困つた顔しても、  
おちんちんはやる気満々みたいだよ……?」

誘惑と言うには、かわいすぎる誘い文句。

色氣はあると思うんだけど、語り口がさっぱりしててるから、  
健全な行為と勘違いしてしまう。

「あ……じやあさ、こうしない?  
とりあえず、今はあ……えいっ!」

「ー?」

手コキの気持ちよさに浸つていた中、  
突如、姉貴が俺の肩を押してくる。

同時に体重をかけられ、抵抗もできないまま、ベッドの上へ押し倒された。

「…………あらら、大人しく押し倒されちゃうなんて、どつちが女の子だかわからないね」

「でも、ちょうどよかつた……一度、男の人に前戯つていうのしてみたかったんだよね……」

ここまでされて、ようやく姉貴の『スイッチ』がオンになつていると気付く。

ここで言うスイッチは、エロモードではなく、仕事モードのこと。

ゲームのヒロインと同化しているかのように、眼差しが熱を帯びていく。

「ちゅつ……ちゅつ、ちゅつちゅつ……上の服まくるね……」

頬から首筋までキスで下つたあと、ぐいっと、Tシャツごと俺の服をまくつていく。

そして、指先でこちらの脇腹を撫でながら、今度は胸板に唇を圧し当ててきた。

「ん……ちゅつ、ちゅつちゅつちゅつ、ちゅつちゅつちゅつ♪ふふ、前にゲームの台本を読んでた時にね……同じようにやつてみたいなつて思つてたの。男の人の全身にキスをして、とろつとろに溶かしちやうの……」

「…………乳首も舐めてみていい?　ちゅつ……ん……はあ、れろつ……ん、れろお……れろれろれろつ、ちゅつ、ちゅうう、ちゅつぱ……はあ、ちゅう、れろん……」

「ああ……っ、あねきつ……」

ヌメついた舌先で乳首を舐め上げられる度に、自分の意思とは関係なく、カラダが跳ね上がる。

とても処女とは思えないテクニック——

と、姉貴がエロゲーのヒロインみたいに思えたけど、実際は、技術云々じやないんだつてわかる。

姉貴は、弟の俺には激甘だから、すべての行為が丁寧で、愛情が伝わつてくる。

よく俺を『愛おしい』って言つてたけど、  
それは嘘じやなかつたんだと思う。

とにかく舌使いが優しくて、  
同時に俺の反応をよく見てるから、  
瞬く間に、弱点を知られてしまう。

「んふ……ピクピクしちやつてかわいいね……  
お肌もスベスベで……ん、ちゅつちゅつ……ちゅつ、  
ちゅつちゅつちゅつちゅつ、ちゅうう、ちゅつ♪」

「う、あああ……っ」

露出している肌に、片つ端からキスの跡が刻まれていく。  
唇が離れる瞬間に、  
チロツと舌で舐められるのが予想外に気持ちよくて、  
声を出さずにはいられなかつた。

「…………んん、どお？ ちょっとでも、お姉ちゃんと  
セックスしたいって思うようになつた？」

「おちんちんの準備はできるみたいだから……  
あとは、心の問題かな……？」

心の準備だつて、すでに出来ている。

というか、最初に初めて手コキされた時から、  
姉貴とセックスしたくて仕方なかつた。

早く童貞を捨てたいから、そう思つてるだけ？

……いや、たぶんそうじやない。

俺は、もっと前から姉貴に好意を持つつていて。

高校時代、すでに俺の毎晩のオカズは、  
実の姉との性行為を妄想したものだつた。

「んしょ……お姉ちゃん、重くない？  
あ、おちんちん潰さないように跨がらないとね

姉貴は一時的にカラダを起こし、  
足を開いて、こちらに跨がつてくる。

エロゲーのCGで、よく見た構図。

下からの主人公視点で見る女性上位の体勢は、  
想像を遙かに上回るエロさだつた。

「…………ふふつ。これが騎乗位の景色なんだ……」「こんな風に、男の人を上から見下ろすのって、す「ぐ新鮮…………でも、少し顔が遠いね…………」」

言うや否や、姉貴は俺に抱きつくよにして、カラダをくっつけてくる。

たぶんつとした乳房に肺を圧迫され、ふたつの膨らみが、胸の上で押し潰れていく。

途轍もなくやわらかいのに、水風船みたいに張りがあって、その上、触れ合った部分がどんどん熱くなっていく。

「ん……ちゅつ♪ 「れでどう? 頬…………近くなつたよ? ……ぼうつとしてないで、お姉ちゃんのこと…………抱きしめてほしいな…………」」

言われるままに抱きしめると、さらにおっぱいが潰れていって、カラダより先に脳がイキそうだつた。

前のラジオで話してたけど、姉貴は胸だけじゃなく、お尻も大きくて、それだけにクビレも目立つ。

まさに、童貞を殺すために生まれた、大量殺戮兵器。

ムチムチしててるのにカラダの骨格は華奢で、きちんとと女の子してるからずるい。

この抱き心地は癖になる。

「…………うん、そう…………その調子…………ん、ちゅつ、ちゅつ♪ 上手にできたから、「これはお姉ちゃんからの『」褒美………… チューしながら、おちんちん触られるの好きでしょ?」」

「ん、ちゅつ、はあ…………ベロ…………ひぶいて…………ん、はあむ、んちゅ、ちゅうう、はあ、れろつ、れろれろれろつ、んん……ちゅううう、ちゅつっぽ、ちゅうううつ、ちゅうううつ、んふ、ちゅううううつ、ぽつ…………」

姉貴の得意技（？）である、ベロチュー手コキ。

普段は優しいのに、この時だけはほんの少しだけ、Sつぽくなる。

俺が舌を出しつぱなしにしていると、それを何度も何度も啄んでは吸つていて。

明らかに、キスは姉貴の方が上手い。

「……おちんちんにも、ベロチューしてほしい?..」

おちんちんにベロチューというパワーワード。

俺の返事を待つことなく、姉貴は逆ハイハイをして、股間に顔を移動させる。

「おねえひやんのこの舌れ……ん、ちゅつ、ちゅつちゅつ、  
ちゅつ……ん、はあむ、んぢゅつ、ぢゅるつ、んぢゅ、  
ぢゅるるつ、んんつ、ぢゅつぽ……ぢゅう、ぢゅぽつ、  
ぢゅるるつ、ぢゅるるうう……つ」

「はあ、れろれろつ、れろれろれろつ、んん……ちゅう、ん、  
はあつ、んん、ちゅつ、ちゅぽつ、ちゅつぽ、ちゅう、  
ぢゅるるつ、ぢゅうう、ぢゅつぽつ、ん、はあ……」

気持ちいいけれど、射精するまではいかない、  
絶妙な刺激の口淫。

舌の動き方が纖細で、  
後を引くような快感を裏筋に刻んでいく。

一生懸命、舌を動かしてフェラをしてくれてる姿は、  
シンプルに俺の胸を熱くさせる。

……こんなのがガチ恋するに決まってるじゃないか。

「……おちんちんにベロチューするのは刺激が強すぎるかな。  
また、お手々にバトンタッチする?」

「ん……すごい気持ちよさそうな顔……  
お姉ちゃんもなんか……  
お腹、ムズムズしてきちゃつた……」

再び手コキに戻り、すぐそばで見つめられる。

俺だけ気持ちよくなつて申し訳ない気分だつたけど、  
姉貴の嬉しそうな顔を見ていたら、それも薄れていった。

「……ねえ、このまま挿れてみない?  
その……お姉ちゃんの……おまんこ、に……」

一瞬、仕事モードが途切れたのか、  
普段の恥ずかしがりな姉貴が顔を覗かせる。

俺から言わせれば、まちがいなく清純な姉なのに、  
あんなシモネタ上等のラジオを任されるなんてな……。

そこは、眞面目な性格が徒（あだ）となつたというか、現場の人やリスナーを喜ばせたくて、がんばりすぎてしまつたんだろう。

…そして今も、きっとがんばりすぎてる。

「ていうかさ……まさかとは思つんだけど……ひょつとして……童貞、だつたりする？」

「ええつー?」

返事をするまでもなかつた。

あまりにも童貞すぎる反応をしてしまつたばかりに。ただでさえ俺の感情を読み取るのが上手い姉貴だから、誤魔化しようがない。

「…………あ、やつぱりそうだつたんだ。  
何となく……そうじやないかなつて思つてたんだよね。  
今までの反応とか見てきて……」

「キスも……手コキも……フェラチオも……  
みんな、初めてだつたつてことでしょ？」

それには、黙つて頷き返す。

姉貴も結構、『こいつ、童貞じやね？』つて、怪しんでたっぽい。

「…………怒つてる? ゼンぶ、お姉ちゃんが奪つちやつて……  
むしろ、感謝しかない。

でもそれを言葉にできない自分がもどかしい。

「…………おちんちんを触りながら訊く」とじやないよね。  
でも、そつかあ……  
まさか、自分の弟が童貞だつたなんてね——」

「ふふつ、姉弟揃つて経験がないなんて、  
そういうとこはお姉ちゃんに似なくてよかつたのに……  
ちゅつ……ん、ちょっと嬉しいけどね……」

考えてみたら、初恋も姉貴に奪われたことになるのかな。  
奪われたつていうのもおかしいけど。

……ていうか、俺が童貞だと知つて嬉しそうじやないか?

「でも、どうしようか……お互い初めてだつたら、お姉ちゃんのバージン奪つてとも言えないよね……」「いっそのこと……お姉ちゃんが童貞をもらっちゃつてもいいかな……もう難しい」と考へるのはやめて、二人で近親相姦……しちゃう……？」

「き、近親……相姦……？」

エロゲーの感想で、姉や妹を攻略する際、近親相姦への葛藤がないと、減点みたいな人もいる。でも、実際に自分がこういう状況になつて、わかつたことがある。

ぶつちやけ、近親相姦とかどうでもいいし、葛藤なんてない。

姉貴もセックスしたがつてるし、俺もしたい。

そこに迷いなんて、あるはずないじやないか。

「男としても気になるでしょ?  
……自分のおちんちんを女の子のおまんこに挿れたら、どのぐらい気持ちいいか……とか……」

悪魔のような囁きに、思わず生睡を飲みこむ。手コキもフェラも期待以上に気持ちよかつた。それら以上に、気持ちいいことがあるなんて、今の俺には想像できない。

「ん……んん……ねえ、わかる?  
今、おちんちんの先が何にこすれてるか……」

「ああつ、ちょっと——」

「カラダを起<sup>二</sup>しちやダメ……じつとしてて……?  
動いたら、おちんちん入つちやうよ……?」

姉貴はサオを根元から握つて、自分の割れ目にこすりつけていく。

咄嗟に上半身を起<sup>二</sup>こうとしたけど、それを止められて、完全な女性上位の体勢に。がつたり跨がられても、まつたく重くないし、姉貴のカラダのラインが綺麗すぎて、それに見惚れてしまう。

「んんんんあ、すいおつきくなつてる……  
おちんちんヌルヌルだから、  
滑つて入つていつちやいそうだね……」

「……のまま童貞を奪われると、お姉ちゃんのバージンを  
奪うの……どつちがいい?  
……」こまできて、逃げたりしないよね?」

しつかりと俺の退路を塞ぎ、  
キスできる距離まで顔を近づけてくる。

童貞を奪われるか、バージンを奪うか、  
どちらにしてもセックスするしかない選択肢。

姉貴も近親相姦の葛藤なんてしている様子はない。

お互い成人しているし、  
セックスへの興味が勝ちすぎている。

「お姉ちゃんに教えてほしいな……台本に書いてある」とが、  
どういうことなのか……」

「おちんちんが奥に当たつて気持ちいいとか……  
ゴリゴリこされる感じとか……  
騎乗位の腰の振り方も覚えたいし……  
中で出されると、どんな感じなのかも……」

「中で出されるといつて……コムは?」

「……え、コム? ああそつか、普通はコンドームしないと、  
ダメなんだよね。  
生でしたら赤ちゃんできちゃうし……」

「ゲームだと、ほとんどエッチの時つけないから、  
なんか……感覚が麻痺してて……」

でも、前にラジオで避妊はしなきやダメって、  
言つてた気がする。

本来なら、姉貴からコンドームをつけてつて、  
頼んできてもおかしくはないのに。

「……ねえ。真面目な話、コムつけしたい?」

「え……」

「初めてのセックスなのに……お互いをコム越しでしか  
感じられなくていいの?」

……なんか、世の中のデキ婚が減らない理由、それがわかつた気がする。

男も女も、発情したら止められないんだ。

しかも、お互初めて同士。

この状況で、理性なんて働くわけもなく。

「ん……ああ、先っぽが入りかけてる……さつきから、おちんちんパンパンだもんね……」

「好きな方を選んでいいよ？ 今からコンドームをつけて、お姉ちゃんに童貞を奪われるか……それとも、このまま生で童貞を奪われちゃうか……」

さすがに、この選択肢はざるいと思つた。

一生に一度しかない初体験だ。

そりやあ、生がいいに決まつてる。

「…………ねえ、どつち？ 黙つてたら、生で決定しちゃうよ？  
お姉ちゃんが妊娠しちゃつてもいいの……？  
ほら……先っぽがどんどんお姉ちゃんのおまんこを  
抜げていつてる……」

「…………」

抵抗できない。

姉貴が妊娠して、  
声優の仕事を休まなきやいけなくなつたら、  
自分だけじゃなく、他のファンも悲しむのに。

このまま、挿れたくて挿れたくて仕方がない。

「…………結局、生がいいんだ？ 男の子は正直だね……  
じゃあ、お姉ちゃんのバージンと童貞を交換しよっか。  
『めんね、初めての相手がお姉ちゃんなんかで……』」

覚悟を決めたのか、姉貴はゆっくりと腰を沈めてくる。  
完全に任せっきりだつたけど、入り口が小さくて、  
亀頭に、かなり強い抵抗を感じる。

「ん……んつう、んんつ……はあ……あれ?  
もつと簡単に入ると思つてたのに……  
おちんちんがおつきいから……んんつ、あつ……ああ、  
ちょっと……苦しい……ん、はあ……んつう、んんつ、  
はあつ、んなんつ……」

必死に自分の性器をこすりつけてきて、  
その健気な姿に、興奮を抑えられなくなる。

このままだと、いつ射精してもおかしくない。  
オナニーは自分で刺激を調節できるけど、  
女性上位だと、そういうた計算ができない。

「……はあ、そつちは平氣? おちんちん、痛くない?  
まだ半分ぐらいしか入つてないのに……  
圧迫感がすくなくて……んんつう、んんんつ……ん……」

半分どころか、まだ先っぽしか入つていない……  
という事実はさておき。

姉貴も初体験は痛いという情報を知つてゐるからか、  
少し動きが臆病になつてゐるし、狭い膣口で亀頭を  
締めつけられ続けるのも、正直しんどい。

奥まで入る前に暴発だけは避けたい。

「……え? 急に何? お尻をつかんでつ……んあつ!?  
ああつ、やあつ……おちんちんつ、だめつ……  
無理つ……」「れ以上、入らなつ、んつんん!…?  
んつんん! んああつ、ああつ、ああああつ!…?」

「んつう、んんつ……く……は、あつ……入つてゐ……  
おちんちん、ぜんぶつ……お姉ちゃんの膣内につ……」

安産型すぎる骨盤の形に惚れ惚れしながら、  
両手で尻肉を鷲掴み、一気に突き上げる。

なんだかんだで、男としては自分から動いて、  
バージンを奪いたいというのがあつたのかもしれない。  
逃げようとする腰を掴んで、ぐつと引き寄せた。

初めて味わつた膣の感触は、とにかく狭さが際立つていて。  
あとは、その熱さにびっくりした。

「ん、はあつ……待つて、動かないで……少しだけ、  
じつとしてて……ん……はあ……ああ……  
これがセックス……なんだね……」

どちらにしても、姉貴に抱きつかれたこの状態じや、まともに腰を振ることもできない。

そして、動かすじつとしている間にも、どんどん膣内が愛液で潤つていった。

「……もお、童貞を奪つてやろうと思つたのに、最後は弟にバージンを奪われちゃつたじゃん……すごい勢いでおちんちん突き上げてくるから、びっくりしちゃつた……」

密着した体勢だから結合部は見えないけど……自分のカラダの一部が、姉貴の体内に取り込まれているというのが、不思議な感覚だった。

「……でも、そういう男らしい一面もあるんだね。ん、ちゅつ……ふふつ。これはオトナになつたお祝いのキス……ちゅつ、ん、はあ……れろつ、んん、ちゅつ、んつ、ちゅう、はあ、れろつ、んんつ、ちゅう……」

思ったより、姉貴も余裕があつてホツとする。

こんな間近で、痛みで顔をしかめている様子なんて、見たくはない。

……ずいぶん馴染んだみみたいだし、少しぐらい動いても平気かな？

「ん……おちんちん、動かしたくなっちゃつた? でも残念だつたね……今この体勢……わかるでしょ? 女性上位、っていうの……」

動こうとする気配を感じとつたのか、姉貴に先手を取られる。

両肩をぐつと押さえつけられ、さらに全体重を上乗せされて。

「これから、騎乗位の練習相手になつてもらつから、覚悟してね?」

「いや、待つて」

「はいはい、暴れない暴れない……ふふつ、まずはカラダを起<sup>二</sup>にして……つと

姉貴のカラダが離れて、物理的に『上から目線』になる。

もがこうとした手は恋人つなぎで捕らえられ、完全にペースを持つていかれてしまった。

「ん、ああ……やつぱり枕でするのとは違うね……  
実際におちんちん挿れて……男の人に跨がりながら動くのって……せんせんつ……ちがう……」

「んんつ、はあ……お姉ちゃん……上手に腰……使ってる?  
んつ……ふつう……腰だけを動かすのって……  
難しい……どうしてもカラダ全体が動いちゃう……」

ぎーーちないながらも腰を上下に動かし、ボリュームのある尻肉が、接触の度に乾いた音を響かせる。濡れ音もどんどん激しくなって、ペニスは限界以上に膨張を続けている。

手コキやフェラとはまた違う、膣コキの気持ちよさ。手コキの圧迫感とフェラの閉塞感を足して2で割ったような、ハイブリッドな刺激に、何度も射精まで持つていかれそうになる。

「んつ、ふつく、んんつ……でも……前後に動くのは……  
だいぶ慣れてきたかも……どう……かな?  
お姉ちゃんの腰の動き……見える?」

上下の動きから、前後の動きに切り換えると、ペッドの軋みが大きくなる。

視覚的な興奮が強すぎて、腰の動きを見たいけど、目を逸らしたくなる。

「ん、はあつ……でも疲れたから休憩……ちゅつ、ん……  
少し動いただけでも汗かいちやうね……  
うふふつ、ちゅつ♪ちゅつ♪  
こうやつてくつついてると、のぼせちやうかな?」

よく、夏場におっぱいの下側が汗かいて大変つて言つてたけど……

実際に押しつけられないと、蒸れるような熱さが拡がっていく。

代謝がいいのか、全身もうつすら汗ばんでいる。

「お姉ちゃんのおっぱい、邪魔で」「めんね……  
んん……なあに、顔をむにむにしてほしいの?  
じゃあ、おっぱいで耳塞いじやう……  
ほら、ぎゅうううう……」

「んぶつー? んつ んん、 んんんつー?」

顔面をムシャムシャとおっぱいに食べられて、こつちものぼせ上がつてくる。

挟まれて改めてわかる、姉貴の胸の大きさ。

メチャクチヤエロいおっぱいなのに、  
乳首の色は綺麗な薄ピンクで、まったく黒ずんでいない。

「……あ、息でさるかな? もう一回、耳鳴ぐよ  
んしょ……むにむに、むにむにむに……  
そして、ぎゅうううううううううううううう

完全に俺をオモチャにしてるけど、このおっぱいの前では、無力でしかない。

堪らず、こつちからも頬ずりをして甘えてしまった。

セツクスつて楽しいね……  
実は、最初だけちょびつと痛かつたけど、  
今はなんか……お腹の中がおちんちんでいっぱいに  
なつてるのが、すごく幸せ……」

その幸せを共有したいところだつたけど……

またさつきみたいに、  
杭打ちをするようなピストンをされたら、  
瞬殺されてしまうかもしない。

「あれ、もしかしてお姉ちゃんの...『氣持ちよくない?』顔をしかめてどうしたの?」

まともに姉貴の顔を見られず、横に視線を逸らす。

何とかして気を散らさないと、腰の動きを見ているだけで果ててしまふ可能性もある。

「あ……イツちやいそう……なんだ?  
がんばって、我慢してくれてるんだね……」

姉貴は、何もかもお見通しといった様子だ。

「ん、そうだ……」「うやうへ……わわわ、ん……  
きふしながら……んちゅう、うつう、ん……はあつ、  
」ひをふるのでは……へ」

「んんっ、ちゅっ、んん！ ちゅっ、んんっ、はあつ……  
んっ、んんっ……ちゅう、れろつ……ぴちゃ、ちゅう、  
んんっ、んっ……んつん、ん！ んつんん！ んん！」  
どうやら、姉貴はベロチューが大好きらしい。  
舌が絡められる度にペニスが脈動して、  
俺の制御から離れようとする。

こちらも、ベッドの上でのけ反る時間が長くなる。

「んひ、わゆひ……はあ……ふふひ……樂しくなつて  
んん……」うやうやく、手を恋人つなぎしてえ……  
シーツに撫でえりけちやう……どり、動けない?」

「ん、ちゅつ、はあ、れろつ……んちゅつ……また……  
べ口チューーしよ……んちゅつ、れろつ、れろれろつ、  
ん、ちゅう、はあ……れろつ、ちゅう、んんつ……  
ちゅううつ、んん、ちゅつ、ちゅうううううつ……」

姉貴のソフトなSつぶりがツボすぎて、無駄に被虐心が刺激された。

必要以上に大きく身悶えすると、それを見て、姉貴も興奮してくれる。

キスも激しくなつて、  
口の周りがお互いの唾液でベタベタになる。

姉貴の小さなカラダのどこに、  
これだけのパワーが宿っていたのか。

一方的すぎるセックスだつたけど、女性に犯されている感覚が堪らなかつた。

パブロフの犬みたいに、ベロチューされると、強制的にフル勃起するカラダになっていく。

ペニスの硬度で俺の興奮の度合いを測つてゐるのか、硬くなればなるほど、姉貴の腰振りも激しくなる。限界だった。

息をつく暇もなく、全身を姉貴に貪られる。

気付くと俺も汗だくなつて、シーツに押さえつけられた両手で、必死に恋人つなぎを握り返した。

その瞬間、姉貴は執拗に俺の舌を吸つてくる。尻肉で打ちつけられる接合音が加速し、身も心も、実の姉に蹂躪される。

「ううううーー?」

「んつんー? んん! んんつんー? んぢゅつ、はあ……れろつ、ちゅつ、ちゅううぽつ……はあ、はあ……おちんちんから出ちゃつたね……やつぱり男の人って、『ういうのが興奮するんだ……』」

自分でも怖くなるほどの強烈な射精衝動。根元までぎつちりと咥えこまれた状態で、搾精される。

少しづつ腰の動きが緩やかになつていく一方で、俺のカラダは波打ちっぱなしだった。

ほぼ痙攣に近い、制御不能な状態。

シーツにへばりつくほど尻がびっしょ濡れでいて、射精しただけなのに、激しく呼吸が乱れる。

「…………でも、膣内で出したら赤ちゃんできちゃうかな。本当は、外で出してもらおうと思つてたのに……」

その割には、しつかりと腰を落として、中出しホールドしてきている。

母性全開の優しい眼差しで見つめられると、自分がどんどんダメになっていくのを感じた。

このままだと、本気で姉貴から離れられなくなる。

毎日、中出しをせがんでしまいそうなぐらい。

「『めん、我慢できなくて……』

「少し不安だけど、気にしなくても平気……お姉ちゃんが無理に言つてしたことだもん……けど、どうだつた？お姉ちゃんの膣内で出すの……気持ち、よかつた？」

「……お姉ちゃん、そつちの方が不安だつたの。同じ女でも、アソコがゆるいとかあるみたいだし……初めてセックスしたのに、気持ちよくなかったら、申し訳ないなつて……」

「気持ちよかつたよ。気持ちよすぎで戸惑つてるとこうか……」

「逆に、こつちが心配だよ。

「姉貴は気持ちよくなかったんじゃないかつて……」

「お姉ちゃんは気持ちよかつたよ……？  
ウソついてないつてば……まだ『イク』っていうのは、わからぬいけど……  
バージンの子が初めてのセックスでイキまくるとか、それ『そゲームの中だけの話だと思うし……』」

そんな言葉を聴いて、少し安心する。

お世辞かとも思つたけど、まだイッてはいないという話が、本当に、正直に話してくれるんだとわかつて。

「あとね、ホツとした」ともあるの。  
お姉ちゃん、バージンでいる期間が長かつたから……  
セックスに色々な幻想を抱いてて……もしかしたら、期待ハズレに終わっちゃうんじゃないかなって……」

「ただの取り越し苦労だつたけどね。  
すごく……素敵な初体験だつた……ほんとだよ?  
これだつたら、またしたいなつて思えたもん」

それは俺も一緒だつた。

エロゲーのやり過ぎで、  
セックスの期待値が上がりすぎていて。

インターネットの記事で、  
オナニーの方が気持ちいいなんて言つてる人もいたし、  
実際にするまでは期待半分、不安半分だつた。

「本当は、お姉ちゃんがもつと上手にできたら……  
今より気持ちよくできたのかもしれないけどね」

「そんな」とないよ、ほんと気持ちよかつたから……」

少しずつ、頭の中が冷静になつてきて、ふと、紅衣ほむらの名前が思い浮かぶ。

普通のファンは、ラジオで下着の色を訊くのが精一杯なのに、弟の俺は……当たり前のように、人気声優に中出ししていい。そのことへの優越感もあつたし、改めて間近で見る『紅衣ほむら』のかわいさに感動していた。

「……なんか、いつ離れたらいかわからないね。もう少し、こうやってくつづいてもいい？」

「うん……俺ももう少し、くつづいていたい」

「……ありがと。いつもお姉ちゃんのために、無理してもらって『めんね。大好きだよ、ちゅつ♪』

セックスしている最中のキスより、ずっと軽めの接触だつたけど。

なぜか、頭の芯まで痺れた。

目が合うと、ふたりで恥ずかしくなつて、視線を逸らしてしまう。

仕事モードが終われば、そこにいるのは、幼い頃から俺が知っている、真面目で照れ屋なお姉ちゃんだ。

……でも俺たちって、結局は何なんだろう。

ただのビジネスパートナー？

そうは思いたくない。

少なくとも、俺は。

ビジネスではないパートナーとして、姉貴を見てしまっている。

こんなに好きなのに、それを伝えられないのがもどかしい。

姉貴は俺のことをどう思つてるんだろう。

それを知りたいけど、知るのが怖くもある。

結局、この日から俺は、エロゲーの主人公たちと同じような悩みを抱えるようになった。

家族を恋愛対象として見てしまうと、こんなにも、モヤモヤするものなのか……と。

今は、それを自分の目の届かない胸の奥底に、しまつておくことしかできなかつた……。

※トラック5へ